

『青少年問題』一九五七年七月（青少年問題研究会）

地域における

青年活動の課題



矢口新

(一)

地域社会の青年活動といえ、従来青年団ときまっていた。青年団は伝統ある団体であるから、その活動の仕方も定型があつて、青年団の活動といえ、それは何と何とであるということが常識になつてゐる。所が定型が出来てゐるということは、必ずしもいいことばかりではない。その型が次第にかわつて来ている。社会にあわなくなつていくということもあるのである。そこで新しい活動の仕方を考えようとするが、なかなか古い伝統の型は抜けられない。そこにいろいろな問題が起るのである。

私は嘗つて、青年団の中に行事型といふのがあつたといふことがあつた。毎年の行事が大凡きまつていて、それを次々にやつて行くだけなのが行事型である。行事といふのは、例えば、体育の大会だとか、リクリエーションの大会だとか、村の映画会だとか、そういった地域の行事である。青年団はそういった行事の主権をするのである。いわば行事の主権団体である。青年自身はそこで何をやるのか。こういう行事の場合は、地域の青年の全部が働くわけではない。少数の人が行

事を開催する世話役をするのである。その他の多くの青年はむしろ行事に参加するだけである。動員されるのである。映画大会からその映画を見にくる村の大人と同じように観客であるわけである。こういう風にして行事が年に数回行われる。多い場合は毎月一回ずつ行われることもある。

これを村の大人からみれば、青年団は活発に動いてゐるということになる。毎月一回ずつも村の社会的行事をやつてくれれば村人にはさううつるわけである。しかしこの場合活発なのは、青年団という団体の看板なのである。看板がしばしばかかげられるということである。青年自身はどれぐらい活発に動いたか。月一回行事に参加した、毎月一回リクリエーションをやつたということである。これも活発といえれば活発の中に入るかも知れない。何もしないより活発だといえればその通りである。尤も、行事をやるためには、そのお膳立てをしたり、世話役をしたりする人がいるから、その人は忙しいであろう。ましてそれが毎月一回などということになれば益々忙しいことになる。これに当る人々は、青年団の役員ということになるから、行事型の青年団で忙しいのは役員であるとも言えるかも知れない。最も活発に動いたのは役員ということになる。それに比べれば、平団員で動員される側の人は活発といつても物の数ではない。

尤も行事の中には、それに参加するために準備をしなければならぬものがある。体育大会などというのは、運動競技をするであろうから準備をするのが普通である。対抗競技にでもなれば夢中で準備をする。青年演劇大会などというのもそうである。多くの芝居がかかげられれば、それをやる青年たちの数もかなり多くなる。それから相当長い日数をかけて準備をする。こうなると、役員のみでなく平団員も忙しくなる。

忙しいのは人間にとつてよいことである。忙しく動きまわることにおいて人間は育つのである。今時忙しくないなどというのはおかしいのである。青年時代はとくに忙しくして何でも身につけるのがよいのである。小人閑居して不善をなすなどというが、ぼんやりして、あとで何をしたらのかか思い出せないというような生活を青少年時代おくらせては、青年はだめになるばかりである。酔生夢死というのであろう。

所で余談にわたりすぎたが行事型といつてもその中味はいろいろあることがわかったのである。行事型必ずしもいけないというのではない。けれどもただただ月一回、或は三月に一回青年を動員するだけの行事をやっていたのでは、青年団という看板は活発に出るかも知れないが、青年は活発に動かないことになる。全国一般に見ると青年団は、こういう看板を出すことを考えている青年団が多いのである。村の大人がそういう青年団を期待している。青年もそれにこたえなくてはならぬ。何も行事をしないとこの頃青年団は何もしないではないかなどという声が出て来る。一般の雰囲気は青年団をそういう行事主催団体として期待しているのである。これは青年団の長い伝統から生れた一つの雰囲気であらう。

しかしこの雰囲気は必ずしも青年にとつて有利ではない。青年を育てるために青年にどういふ活動をさせるべきか、どういふ援助をしてやるかという教育的な思いやりのある期待や雰囲気ではないのである。

大人の常識的な、惰性的な青年団体観というものが、青年をのばさないこともあるのである。はなばなしい行事があつて、それに大勢人が集つて来れば、青年団は活発に動いていると考える大人は多いのである。ああ、よくやつてくれた。この頃の青年はなかなかよいなどというのである。しかし、よくやつてくれた人は役員の数人でしかない。何もやらないと、この頃青年団は何をしていると非難する。どうもこ

の頃の青年はだらしがなくとくる。こういうことを言う大人は、とかく青年団に理解ありという人の中に多い。青年教育に理解があるという人が結構その程度の青年団体観なのである。

そういう雰囲気の中で青年団の人々、とくに役員は、如何なる行事をやつて、如何に人を集めるかということばかり考えるのである。或は考えさせられるのである。こうした、行事、行事、人集め、人集めといったことが目標になる。そして、地域の青年が、どう活発に勉強するかということが、忘れられて行くのである。

村の行事といつたものに青年が参加するというのは、封建時代の若衆組からの伝統である。昔の若者教育は、そういう形でおこなわれたのである。固定的な封建の世の中の時代においては、一切の生活がきまつたおきての中で営まれていたのであつて、そのおきてに従つて営まれて行く生活の中に、青年を入れて見習わせるというのが、その教育であつたのである。その雰囲気は、今でも抜けないでいる。そういう考え方で、青年団体を見ようとすると考え方がないわけではない。その場合は、昔の型通りの青年団の動きが行われないと気がすまないのである。こうして結果として、青年団に対して、昔ながらの情性的な活動を要求するのである。

所が地域に住む青年の一人一人を育てるといふ見地に立つとどうなるか。青年団という看板の問題ではないのである。現代の社会は昔の封建の世の中のように人間が一色の生活をし、一色の考え方をもちようにぬりつぶされてはいないのである。一人一人がもつとはるかに自主的に生活し得るのである。その自主的な個性的な活動を通じて社会に貢献するということも考えるようになっていく。すべてがきまつた生活のおきてのわくの中に入れられなければならぬということはない。

事実、今は村の中の青年でも将来村の中に生活するとは限らないものがある。百姓がきらいで外に飛び出すというのではなく、むしろ外へ出なければならぬという運命にある。否、出ることによって、日本の社会に位置づいた生活をするのである。

村の中で百姓をしていても、人と同じことをやっている必要はないのである。自己の独創力を發揮していくらでも工夫し考えることが出来る。それを通じて社会全体に寄与しようとするのである。社会に貢献するというのは現代では、社会の人々とおなじことをやらなくてはならぬということではない。それぞれの持味を生かして社会に寄与することなのである。それは自主的な奉仕である。独創的に、工夫し考えようというのは、抜けがけの巧名をしようとか、自分だけが甘い汁をすうということではない。人々がそれぞれの工夫をし、それをひろげて見せあつて、社会全体がよいものをえらび出して、レベルがあがつて行く。そのあがつたレベルの所でまた人々が工夫するからまた次の高いものが出て来るのである。ここに現代社会が一人一人の力を尊重し、自主性を重んずる理由があるのである。

現代で地域の青年が活発に活動するというのは、だから封建の世の中とは非常にちがったことなのである。今封建の世の中と比べたけれども、それは考え方をはっきりさせるため、これからの青年活動を考える場合の基本的な観点を述べたのである。そういうことが案外にはつきりとせず、漠然と青年活動などといっているのは、やはり封建の世の中の考え方の伝統の中にあつて、その情性から抜け切れないでいることなのである。

(一)

青年団ではこの頃グループ活動ということが言われ出した。前に述

べた行事団体でなく、もっと成員の一人一人が活動するようにということであろう。それには小さいグループで活動するのがよいというので、小人数で、読書グループとか、演劇グループとか、農事グループとかをつくって活動することが行われ出した。こういう形のもので典型的なものに4Hクラブがある。

4Hクラブは青年団とちがって、新しい団体活動である。それは農林省の農業改良普及の事業の線にのって応援されて出来上った青年活動である。大抵どのクラブも十四、五人の集りで改良普及員を指導者に行っている。活動の内容は個人のプロジェクトが中心であつて、それぞれ何か自分の課題をもつて、それをやる。課題は栽培に関するものが多い。例えば、きうりの栽培とか、たまねぎの栽培とかいったことである。普及員から話を聞いては、それを自分で実施してみ、研究して行くわけである。グループはしばしば集つてお互のプロジェクトを話し合う。大体こういった形で行われている。

こういう形式の活動になると一人一人が何か目的をもつて活動している。そしてたえず活動している。クラブのメンバーになる青年は二十歳前後が多いから、その年頃の者では、まだ一人前の者は少ない。親からすこしの畑をかりてやっているのが多いようである。なかには経営をまかされている者もいる。ともかく、自分の一生の仕事になることについて、研究的にやっているわけである。だからこのクラブのメンバーになる者は俗に言う長男層が多いので、二、三男で、将来は都会へ出なければならぬという者は、たとえ現在農業にたずさわつていても入って来ないのである。これはクラブみんな協働しながら一人一人を育てているという姿である。この形はさきに述べた青年団の行事へ参加するのは根本的にちがっているといえよう。

4Hクラブの研究することには、大人が常識的或は情性的にこうだ

と思ひこんでいる物をくつがえすものがあるのである。大人の中には、なにを若い者に何が出来たかなどという者もいて、意見の対立を来たすこともある。しかしそれは研究の段階でまだ実際の経営に係属したことでないから、大人もだまって見ている。所がそれが結構立派な結果をみせることもある。こうして大人は青年が、今までにないことをやり出すのをだんだん認めるようになっていく。しかしそれはなかなか大きい意味をもっているものであって、そういうように、大人が青年の自由な研究を大きい目で見てやるようになるのと青年がのびる地盤が出来たことになるのである。ここから本当の青年活動が起つて来るし、一人一人が育つようになるであろう。

しかしそうかといって、まだそういう雰囲気が行き亘っているわけではないので、何か失敗すると、それ見たことかと非難して、ただでさえくさっている青年を益々くさらせるようなことも多いのである。そういうことでは青年活動は本物にならないのである。

仕事がこの場合プロジェクトが失敗か成功かということにとらわれすぎると、また青年を育てることにならないのである。成功でも失敗でも、その過程がはつきり自覚的に研究されて行く所に人間が育つてゆくのである。人間の成長は仕事のプロセスそのものの中にあるのである。結果が成功でも、人間が成長していかないことがある。例えば、こういうクラブがあった。何かの野菜をみんなで作って一もうけしようというので一生懸命やって無事出荷をした。それが大成成功だった。村の大人までそれをまねするものが出た。これは4Hクラブとしては大成成功であった。所が翌年やったら大失敗に終って損をした。そうしたらクラブはつぶれてしまったというのである。

これは残念ながら目的をあやまったのである。即ちもうけることが目的になりすぎて、クラブは、青年自身が育つて行く、勉強して行く

ためにあるものだとすることを忘れていたのである。だから損をしたからクラブまでやめてしまった。青年は自分達の勉強をやめたというわけである。失敗した時こそここに失敗があったのかを研究するために益々皆で集つて研究してよいのである。そこで人間も利巧になるのである。所がそう考えられないのである。本末を転倒しているといつてよい。しかしこれは青年ばかりでない。大人もそういう点から4Hクラブを批判するのである。損ばかりしているのでは仕方がないからやめてしまえなどというのである。これは青年を育てるためのクラブ活動であることを忘れているのである。

人間が成長して行くことを考えるということとはなかなかむづかしいことである。或る結果が立派だから、それをやった人間も立派だといふわけには行かないことがある。或る4Hクラブが何か立派な成果を出そうというので、一人の指導者に従つて或るプロジェクトをした。その場合クラブの一人はただただ一人の指導者の言うがままに使い走りをしただけだった。それで結果は立派に出たけれども、一人一人は何をやったかわからないということもあつた。この場合、一人の立派な指導者がいて、それに従つてやると成功するのだということは皆がさとしたかも知れない。その点で皆は利巧になつたから何も役に立たないというわけではない。しかしプロジェクトの内容そのものはよくわからないままに過ぎてしまつたということだから、その点については何も役にたたなかつたということになる。

青年の活動が、実際に青年の成長に対してどう役立つかということ、よく考えてみなければならぬことである。ただただ活動しさえすればよいのではない。何かやることで、却つてスポイルしてしまうこともある。本当に物がわかり、仕事が出来た立派な人間をつくらうとすると、大人は余程かまえ方をしっかりしなければならぬのである。

(三)

近ごろ村づくりに青年の力を結集するなどということが言われている。併し実際はそういった社会的な仕事には戦後しばらくの間の方が青年の活動が活発であった。現在はむしろ青年が活躍しにくくなっている時代である。それだからこそ青年の活動を期待するというようなことが言われるのかも知れない。例えば去年からはじまった新農山漁村建設総合対策という大がかりな政府の事業にも青年を利用しようという意図はかなりはっきりあらわれている。利用ということにささかおだやかでないが、実は結局において、利用ということになってしまふのでないかと思われる危険性があるのである。

新農村の建設だなどというところ、青年は、とびつきやすいのである。甚だ美しい名前である。恐らく青年は、本気になって情熱をもやすであらう。しかし現実はその名前のように美しくはない。理想的なことばかりではない。新農村といっても、昨日までの村人がすっかり生れかわるわけでない。一年や二年でそう簡単に新しくなるわけではない。政府の補助金をもらって、いろいろな事業が起り、新しい建物が二つ三つ出来るかも知れないが、それが必ずしも新しいということには値しないであらう。それをやっている人はやっぱり古い人である。否古いばかりでなく、政府から補助金が出るというようなことには、利害をめぐって、みにくいことも多く行われる。新農村の建設ということはどこかへ姿を消してしまうことも多くあるであらう。

若しそういうことの中へ青年が入りこむとどういうことになるのか。理想をもって青年が入って行っても恐らく失望するかも知れない。場合によっては、利害関係の中へ入りこんで自分もまた古い人の仲間へ没落するかも知れない。公明選挙運動が行われて、多くの青年が選

挙違反の罪にとわれたようなものである。

こういう所を大人も、青年自身もよく考えなければならぬ。大人の社会へ、青年が理想をもって入りこむことは、よいことである。しかし、それが必ずしも理想通りに行かないことは、また事実である。しかしまた、そこでそういうことを青年が勉強をして、世の中のむつかしさをさとることが出来ればよい。所が、簡単に失望してしまつて、社会的な仕事に手を出さなくなるといふことなら、これは困ったことである。それでは、いつまでたつても大人になれない。といって、大人の世界のずるさ、わるがしこさをすっかりものにして、青年としての理想や情熱を失つてもまた、因りものである。

地域の青年活動が活発であったのが、具合がわるくなつたり、脱落したりする理由をしらべてみると、大抵は、こういった大人の世界との接触から、青年の団体にひびが入つて来る場合が多いようである。ここには、なかなかむつかしい問題があるようである。青年自身の問題なのか、大人の問題なのか、その両方なのか。

青年の活動が青年の世界で、といつても比較的事ではあるが行われている時は、まず教育的であるといつてよい。しかしそれが大人の世界と接触をもつようになると、決して教育的ばかりではないといふことになる。所が、青年だけの世界で行われている活動はどちらかといふとまだ観念的であり、現実的ではないわけである。本当に生活していかないとも言える。

だから若し、大人の世界に入つて青年が活動し、そこで教育されれば、これは最もすぐれた教育であらう。所が、その教育はともすると悪く教育して、青年をスポイルしてしまうこともある。また逆に大人の世界の中へ入つて、そこで、もまれて、ますますみがかけられて来ることもあるであらう。後者のようなことを、われわれは望むの

である。が、それはもう偶然にしかあり得ないことなのかどうか。

青年の側から言えば、青年らしい理想を失わないで、現実を批判的にみて行くことを失わないでいるということであろう。しかもそれはアウトサイダーとしてただただ見ているだけでなく、現実と協力して行くことである。協力しながら、まきこまれないで生活することとはむつかしいことである。そういった青年活動が行われることが理想となって来る。協力しないということならまた青年はとたんに、けんかをする。何でも大人のやることを反動とし、批判をする。そうしてそれもまた青年活動が伸長しない原因となる。協力するとなるとまた大人を無批判にとり入れて、是非善悪の区別がなくなってしまう。これも青年活動の脱落のもとになる。その中間にあるもの、本当は中間というより、根本的により深い立場なのであるが、そういう青年の活動が最も望ましいことなのである。

しかし、そういうことが果して望まれるであろうか。大人の世界は、現実の場となると、利害関係が先に立って、青年を見さかいてもなく利用しようとすることが多いのである。青年を育てようなどという余裕はないのが普通である。選挙の時の大人の態度が、最もよくそれをあらわしている。だから、大人が青年を育てようと考えない限りは、青年は、なかなか育たないとも言えるのである。ということは、大人も一緒になって青年の理想を育てるといふことなのである。ということでは、大人も未来に生きるということを、もう一度思い出すということである。大人が青年と共に歩むということが、青年活動を育てる所以である。

(国立教育研究所)